

日本語のノダに類する文末談話標識の通言語的研究：
「思考プロセス」の観点からのアプローチ
(平成 26 年度第 2 回研究会)

日時： 平成 26 年 11 月 8 日 (土曜日) (午前 9 時より午後 7 時まで)
9 日 (日曜日) (午前 9 時より午後 3 時半まで)

場所： AA 研 302 号室

報告者名： 角田三枝 (AA 研共同研究員 立正大学非常勤講師)

2014 年度 第 1 回 研究会報告

参加者 (9 名)： 梅谷博之、海老原志穂、大塚行誠、桐生和幸、児倉徳和、
千田俊太郎、角田太作、星泉、角田三枝

<研究会の内容>

11 月 8 日

- 1) 海老原志穂 (AA 研共同研究員、AA 研研究機関研究員)
「アムド・チベット語の調査結果」
- 2) 大塚行誠 (AA 研共同研究員、東京外国語大学)
「ビルマ語調査結果見直し」
- 3) 梅谷博之 (AA 研共同研究員、AA 研特任研究員)
「モンゴル語調査結果見直し」
- 4) 桐生和幸 (AA 研共同研究員、美作大学)
「ネワール語調査結果見直し」
- 5) 千田俊太郎 (朝鮮語)
「朝鮮語調査結果見直し」
- 6) 全員
「今後の調査研究、および発表に向けてのディスカッション」

11 月 9 日

- 1) 児倉徳和 (AA 研所員)
「シベ語の調査結果見直し」
- 2) 星泉 (AA 研所員)
「カム・チベット語の調査結果見直し」
- 3) 角田三枝

「調査結果とノダのサイクルの関係」

4) 全員

「今後の調査研究、および発表に向けてのディスカッション」

5) 児倉徳和、千田俊太郎

「コンピュータ上のデータの管理」

<今回の研究会の成果>

昨年度、漫画による調査票を作成し、その共通の調査票を用いて、各言語の調査を行った。今回は、ビルマ語（大塚行誠）、モンゴル語（梅谷博之）、ネワール語（桐生和幸）、朝鮮語（千田俊太郎）、シベ語（児倉徳和）、カム・チベット語（星泉）の6つの言語について、各言語の担当者が調査結果を再度検討した。調査結果の見直しにあたっては、角田三枝が前回の調査結果の発表後に、それぞれの言語の調査結果を検討してまとめた質問、コメントなども考察の材料とした。

アムド・チベット語（海老原志穂）は、コンサルタントを変えて、新たに行った調査について発表を行った。

角田三枝がこれまでの調査結果と新たな発見をもとに、ノダ相当の形態の用法の全体像を考察し、図式化してみた。その図の上で、各言語と「思考プロセス」の関係、および各言語の特徴を示した。

調査結果を検討しているうちに、次第に各言語と「思考プロセス」との関係が明らかになりつつある。すべての言語において、「思考プロセス」をノダ相当の形態その他でマークすることが明らかになり、しかも用法の広がりや言語によって異なることも明らかになってきた。また、言語ごとに、何らかの制限があることもわかってきた。今後も調査結果をより綿密に検討することにより、各言語の制限を加味したうえで、各用法との関係をさらに解明してゆく方針である。

コンピュータ上での調査結果の整理、共有のための準備も進展しつつある。

また、これまでの談話研究と比べ、本研究の特異性と利点が次第に明らかになってきている。角田太作が本プロジェクトをWallace ChafeのPear Story ProjectとDan SlobinのFrog Story Projectと比較するなどして、談話の通言語的研究における、本プロジェクトの位置づけを行い、本プロジェクトの独創的な貢献を指摘した。